

Title	ソクラティック・ダイアログ in Osaka
Author(s)	馬嶋, 裕; 大北, 全俊
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 4, p. 25-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6430
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ソクラティック・ダイアローグ in Osaka

ソクラティック・ダイアローグの面白さは、ルールや結論だけを報告するだけでは分かってもらえない... そういうもどかしさから、イギリスから帰って2ヶ月後、手探り状態ではあるけれども、イギリスで学んだ最低限の知識や経験から、私たち臨床哲学の有志メンバーで大阪大学にて(おそらく日本で初めての)ソクラティック・ダイアローグのワークショップを企画した。以下はその参加者からのメッセージである。

馬嶋 裕さんより

先日、本間・堀江両氏の呼びかけによって催されたソクラティック・ダイアローグ(以下、SD)に参加した感想を少々述べる。イギリスでのワークショップに参加した両氏は、この実践について少なからぬ興奮を持って語っていたものであるが、私たちも、と不慣れながら短縮版を实际やってみただけでもその片鱗はうかがえたように思えた。日常生活ではあまりない頭の使い方をする事になり、それに伴う独特の心地よさがあるのだ。もちろんこうしたことは偶発的に訪れうるものだし、私に限って言えば小中高時代の「討論会」などでもテーマによってはこうした興奮を感じたものだが、SDは意識的にそうした状況を作り出すための術というか、ルールのセットであり、それを採用することで実際にある仕方で哲学「する」ことができるという具体性がある。哲学「する」と言うことでは、この実践においては、哲学「研究」の「ウンチク垂れ」が厳禁されているということが有効に働いている(実際、私も「ゲンゴコウイロンテキに」とか「二宮尊徳が...」などと途中まで口走ってしまったのだ

が、幸い自制できた)。「具体性」というのは、「ステートメント(言明)」という形で思考・発言の要旨を司会が紙に書き出すという作業が組み込まれているために、思索にとまらないがちとされる「とりとめのなさ」がかなり防止されるゆえである。

哲学とは、専門的訓練を受けてなければ口出しできないようなものだ、といういわば「密教的」な哲学観。そういう見解が、現場での「哲学すること」を妨げてきたのだとすれば、SDは臨床哲学にとってかなり強力な持ち駒とってよい。「ソクラテス的」とは、誰にでも関係があり、論じることができるテーマ、スタイルとしての哲学、というより本来的な「顕教的」哲学観を体現する形容詞だからである(もちろん、仏教と同じで最終的には顕密のどちらがよい、ということはいえないことは言うまでもない)。

ところで、私は半年間専門学校の看護科で論理学と倫理学を講じた。そして生徒たちの間に、「...とは何か」というテーマ群について意外なほど関心が高いのを実感した。それも、そうした問題について「昔の偉い人がどういっているか」という関心の持ち方ではない。私は、毎回講義の残り時

間に生徒たちに意見を書いてもらい、その一部をまた(匿名で)プリントにして配布したのだが、それを手にした生徒たちは大変興味深そうに読みふけていたのである。おそらく、彼らは各々内にそうした関心をくすぶらせながら、同世代の友人たちとその関心を共有する回路を見出せていないのだ。それは現代の人間関係のあり方から醸し出される雰囲気、それとも教育制度のためなのか。いずれも陳腐な言い方で恐縮するほかないが、そもそもここで解答できるような問題ではないだろう。それにしても40人程度のクラスでは「討論会」にしても実施するのはかなりの困難が予想されたのは事実である。

現行のクラス編成では、多くても10人程度で、という制約のあるSDではさらに実施は困難であろう。しかし、私は期待している。これから私たちがSDを「やり込んで」いくうちに、こうした制約を形作っている現行の教育制度への対案を示せるような足場が形成されていくようなこともないとは限らない、と。

(まじまひろし・博士後期課程)

大北全俊さんより

自ら事例を出したのものとして、その感想を述べます。

その事例は、自分ではすでに整理のつけられた物語だと思っていたので、それを具体的に話すだけだと思っていました。しかし、「具体的に」語っていくうちに、自分でも思わぬ展開になっていくのを体験しました。というよりも、具体的に語っていくうちに、自分では忘れていたような出来事

が実はすごく重要な意味を持っていたことに気づいて自分でも驚いたのです。それを簡単に「自己発見」と言えなくもないのですが、すでに「終わっていたはず」の物語がその忘れていた出来事を思い出したことで未だ「終わってはいない」物語であることに気づきました。あるいは、自分の物語を「発見した」というよりも、「新たに作り出した」という感じもします。

漠然と頭の中にある出来事を具体的に言葉にし、しかもそれを他者と共有してゆこうという作業は、単に語る人から聴く人への伝達ではなく、創造行為としてまさに共同作業という感じがありました。

ただ、共同作業という点では、反省点がないではありません。先に自分で自分の事例を語りながら「新たに作り出している」と述べましたが、ということは別様にも事例を作り替えられるということです。この「作り替えられる」過程こそが共同作業の故であり、もし本当に僕の手を放れてその事例が共同作業の俎上にのぼったならば、自分たちが進めている作業そのものについてのダイアログ、つまりメタ・ダイアログが発生したのではないかと思います。そして、その場が議論＝作業の進め方を巡る何らかのポリティクスが作動する場になったのではないかと、そして、その「駆け引き」はダイアログにとって本質的な出来事ではないのか。時間の制約のために僕からの「語り」が中心になり事例の他者との共有が不十分だったため、メタ・ダイアログは発生しませんでした。もし出来るなら、次はそれが発生するほどの作業をしてみたいと思います。

(おおきたたけとし・博士後期課程)